

生態学と経済学

塩谷 喜雄

論説委員

日本経済新聞論説委員

今、欧州は政治も経済も「環境」を軸に展開している。何でも「エコ」の環境原理主義にはいささか抵抗のある人々も、文明の持続可能性 = サステナビリティへの理解度は高い。エコロジー（生態学）とエコノミー（経済学）が敵対せずに、共存へと向かっている。

物理学者であるドイツのメルケル首相が議長を務め、この6月にバルト海に臨む保養地ハイリゲンダムで開いた G8 サミットを取材に、久しぶりにドイツを訪れた。サミットは欧州が想定内、折込済みの妥協をして、これまで温暖化防止に背を向けてきた2大排出国、米中をポスト京都議定書の新しい枠組みづくりに引き込んだ。

次期サミットの議長国日本の安倍首相にも適当に花を持たせつつ、中国には「否」と言わせず、米国には明確な路線転換を約束させた。京都議定書採択の立役者、10年前のドイツ環境相、メルケル博士の見事な手腕が際立ったサミットだったといえる。

メルケル首相は保守派のキリスト教民主同盟の党首で、政治的なポジションは、緑の党と社会民主党の連立内閣とは明らかに違う。が、こと環境に関しては、原発の扱いを除けば政策はあまり変わらない。同じく保守派のサルコジ仏新大統領も、環境大臣を副首相格として登用し、環境をことのほか重要視している。

社会民主主義から保守派への政権交代が相次ぐ欧州だが、環境重視、サステナビリティ重視の基本姿勢はまったく揺らいでいない。むしろ現実的で実現可能な政策として、経済界を巻き込んで定着し始めている。米国の動向ばかり注視してきた日本の政界や経済界は、欧州のこうした肩肘張らないが着実に骨太な環境主義を、理解しかねているようだ。

その解はエコロジーとエコノミーの関係にあるのだと思う。もともと両者は同じルーツから生まれている。家を意味するエコ。家の中のやりくり、家同士のやり取りを解き明かすのがエコノミー、家と自然、外界との関係を総合的に扱うのがエコロジー。たしかそう教わった。

産業革命以来、社会の意識も、倫理も、政治も、みんな経済合理性をその柱にすえてきた。富の蓄積が文化も育てる。要するに文明の縦糸が経済という自己増殖する論理に貫かれていた。資源や環境を制約なしに利用する科学技術を手にすることで、経済は自由に大きくはばたいた。

1960年代から、その限界を文明自身が認識し始める。ローマクラブの「成長の限界」がその先駆けであろう。当時はまだおおらかだった。新聞社の面接で「君、生態学は危機の学問だってゆうね、ローマクラブの報告なんかでも」と聞かれて、「危機になってから初めて、生態学に注目するような社会だから危機が到来する」などと生意気をいった学生を採用してくれた。

今、地球環境は残念ながら待ったなしの危機のふちにある。これまで経済合理性を支える基盤だった科学技術が、その危機を何より雄弁に証明している。森林を伐り尽くし、河をスポイルし尽くした欧州は、文明の転換にいち早く着手するポジションを

得たのかもしれない。

それは自然再生への強い願望となって表れた。公園、パークの語源とされるドイツ語のParkは、開発によってつくられた階段状の荒地のことだという。シュバルツバルトもブーローニュの森も、みんな人工林。広大な丘陵のあちこちにバリカンで刈り残したような森が作られ、欧州の人々はその森をなめるようにいつくしむ。きのこ採りや狩猟など、森を楽しむことも忘れない。

文明は「田舎」と「都市」の再定義と再構成と向かっている。シビルエンジニアリングとして、産業革命以降はほとんど「都市建設」の手立てとして、都市生活の快適と安全の担い手として技術を積み重ねてきた土木工学が、いま変貌を遂げている。直線化してただすばやく水を流し、洪水を回避する河川工学から、生態系を意識した蛇行の復活へ。

スイスやドイツで始まった河川の逆改修、元の曲がりくねった流路に戻し、都市部の暗渠をオープンに復する。短期的な経済合理性から、長期的な経済合理性 = 持続可能性への転換。見た目にも鮮やかな河川工法の変化は、1992年にリオデジャネイロで開いた地球サミットの持続可能な開発をうたったアジェンダ 21 の先取りだったといっている。

経済学の法則と、生態学の法則は、本来的に矛盾しない。経済合理性も時間軸を長くにとって考えれば、積分値としてのサステナビリティに帰する。近代文明の先導者だった欧州はそれを身にしみているのかもしれない。きれいごとで文明の転換が簡単に進むわけではないが、軸足を移して視点を変えて眺めてみれば、土木が持つサステナビリティのポテンシャルが見えてくるのではないか。

力任せのエネルギー投入ではなく、土地柄になじむ手法が最高の土木技術だと、これも昔教わった。なじむという感覚はサステナビリティそのものといっている。

清潔と丹精が凝縮したようなドイツの田園と都市の風景に、格差社会への憤懣を象徴するようなポップアート風落書きが、あちこちで「異」を唱えている。かの国でも、経済学と生態学の共生には、まだまだ苦難の道が続くのだろう。